書　評

清水長正・澤田結基　編
『日本の風穴―冷涼のしくみと産業・観光への活用―』
古今書院　2015年10月　282頁 5,500円＋税

2014年8月30日に長野県大町市で開催された「第1回風穴小屋サミット」には全国から風穴の所有者，管理者，研究者などが百名以上集まった。このサミット開催に合わせて資料集と「全国風穴小屋マップ」が作成・公開され，これら一連のとりくみが結実して，本書『日本の風穴』は刊行された。

風穴とは「夏に山の斜面から天然の冷風が吹き出す穴，またはそうした現象」を意味する。これまで評者は富士山麓の溶岩トンネルを風穴の代表例と考えてきたが，本書を読み，全国の風穴を見わたすと，想像以上に多様性があることに驚かされた。日本では，溶岩トンネルよりもむしろ，「崖錐型風穴」という斜面の基部や凹型斜面へ向けて崩落した岩屑が急傾斜に堆積してできる空隙が風穴となったものが多いらしい。さらに，「風穴」が「かざあな」ではなく「ふうけつ」と呼ばれるようになったのは明治になってからであること，それは近代の養蚕業の勃興と深く関わっていたことなど，知っているようで，じつはほとんど知らなかった事実が次々と登場する。このように，本書が描く「風穴」の世界が広くかつ深いのは，本書が地形・地質・気象・生物・農・建築・産業史・地域文化など様々な分野から「風穴」に光をあて，研究者のみならず，地域の人びと，すなわち風穴の所有者や管理者などが情報を交換した成果であるためである。それ自体がじつに魅力的で，新しい研究組織の1つのモデルを提示しているといってよい。

本書は4部で構成されている。まず風穴についての本書の基本的認識を読者と共有し（第Ⅰ部），研究者による具体的な調査報告で風穴のしくみ，歴史，制度，植生などを多面的に理解する（第Ⅱ部）。各地から寄せられた風穴レポートは風穴の地域的多様性を示し（第Ⅲ部），今日における風穴の再評価と新しいとりくみの7つの紹介は，風穴を単なる遺構ではなく，現在へつながる魅力的な「場」として，その可能性を伝えている（第Ⅳ部）。8つのコラムと5つの基礎データ（「日本の風穴分布」，「巻頭インタビュー」，「風穴にかかわる文献」，「全国風穴小屋一覧表」，「全国自然風穴一覧表」）が加わっていることも，読者を風穴の世界に誘う仕掛けとして見逃せない。

以下に目次を示し，部ごとに内容をみていこう。

第Ⅰ部　風穴とは
　第1章　日本の風穴
　第2章　風穴のしくみ

第Ⅱ部　風穴調査最前線
　第3章　風穴がもたらした養蚕業の発展
　第4章　蚕種貯蔵風穴の歴史と制度
　第5章　風穴小屋の原形と変容の方向性
　第6章　大館の風穴
　第7章　風穴風の吹き出しと吸い込み
　第8章　草津・氷谷風穴での観測
　第9章　富士風穴の氷穴に関する考察
　第10章　稲核の風穴本元における温度観測と氷の消長
　第11章　鬼押出し溶岩の風穴群と湧水
　第12章　北海道の風穴植生観察記
　第13章　東北の風穴に生息する希少種エゾヒョウタンボクの生育特性

第Ⅲ部　各地の風穴だより
　遠軽地域の風穴（北海道），然別火山群の風穴（北海道），長走風穴の過去と現在（秋田県），湯沢の三関風穴（秋田県），中山風穴地（福島県），奥多摩の風穴（東京都・山梨県），津南町の風穴（新潟県），入沢風穴と風穴新聞（長野県），上田周辺の風穴探索（長野県），真田の氷平風穴（長野県），前田風穴沿革誌（長野県），風穴山の飯田風穴（長野県），備後風穴（広島県），笠山の風穴（山口県），阿波池田の箸蔵風穴（徳島県），雲仙岳の風穴（長崎県）

第Ⅳ部　風穴へのとりくみ
　第14章　世界文化遺産となった荒船風穴
　第15章　風穴熟成のまろやかな酒
　第16章　風穴の再発見から利用へ
　第17章　風穴利活用委員会を立ち上げる
　第18章　風穴を教育と普及に役立てる
　第19章　クールスポットの新たな活用へ
　第20章　全国風穴小屋サミットを開催する

第Ⅰ部「風穴とは」では，過去の利用，現在から未来への利活用を論じる前提として，風穴の概念が論じられる。冒頭でも述べたように，風穴とは「夏に山の斜面から天然の冷風が吹き出す穴，またはそうした現象」を意味し，その形態には多様性がある。江戸期に天然の冷蔵倉庫として利用された風穴の重要性が飛躍的に高まるのは明治期である。風穴が蚕種の貯蔵庫として全国に普及したからである。明治後期には『風穴論』，『風穴新論』などの啓蒙書，技術書が著され，大正期には研究者による科学的調査が盛んになった。「かざあな」が「ふうけつ」と音読みになるのもこの時期からであるというのは興味深い。また，昭和期には蚕種だけでなく，植林用種子（カラマツ・スギ）を貯蔵する手法が確立したことから，秋田営林局が『風穴』を刊行している。評者自身，風穴を見学した経験の中で，それが蚕種の保存に使われていたことは知っていたが，マツやスギの種子を貯蔵することもあったとは知らなかった。風穴には，近代農業史における種苗技術の革新に関する研究としても，今後注目すべきテーマが多分に含まれている。評者自身も農業史の立場から，近代養蚕業の研究蓄積[1]の上に展開させる次なるテーマをつかむきっかけを得た。

第Ⅱ部は大きく3つに分かれている。1つめは風穴の「歴史と制度」（第3章，第4章），2つめは風穴の「形態やしくみ」（第5章～第11章），3つめは「植生」（第12章，第13章）についてである。まさに文理融合，多角的に風穴に光をあてる11の論考は，いずれもフィールドワークにもとづいているため，具体的で興味深い。

「歴史と制度」では，近代日本の養蚕業の発達と蚕種貯蔵は，風穴なくして実現しえなかったことが論じられる。江戸時代までは春に限定されていた養蚕が，なぜ，いかにして近代になると複数回飼育されるようになるのか。それは蚕種冷蔵法と究理催青法（蚕種からカイコの幼虫を孵化させる技術）によって初めて可能となった。桑の成長や農作業に合わせて，自然任せではなく，人為的に孵化させる技術が確立したのである。養蚕が盛んであった長野県では明治39年に「風穴取締規則」が制定され，全国に先駆けて風穴を公的規制のもとに置くための法令化が進んだ。

続く「形態やしくみ」に関する論考では，風穴に施設を構えた「風穴小屋」を建築学の視点から分析し，風穴から冷気が吹き出すしくみを微気候観測および風穴の温度観察から実証し，氷の変化と洞窟内環境の観測から「氷穴」について論じ，氷体の維持状況の観測から風穴群と湧水の関係を明らかにしている。地形，空気，水，氷の結節点に風穴が位置していると理解できた。

残る2つの論考は，様々な自然条件の結節点としての風穴にみられる特徴ある「植生」を論じている。風穴という局所的な低温環境が維持されたため，エゾヒョウタンボクなどの亜高山植物と高層湿原の蘚苔類がみられる。これは氷河期の「遺存植生」であるという見解は重要である。

第Ⅲ部は各地の風穴についてのレポート集となっている。見開き2，3ページに図表3，4枚が盛り込まれているため，限られた文字数ではあるが，臨場感があり，読者が各地の風穴に足を運んでみたくなるような情報が集められている。鉱山，火山との関係，養蚕の歴史，祖先を知るルーツ，子供の教育の場，植生の天然記念物，ジオパークなど，多彩なテーマが並ぶ。それぞれのレポートから，風穴そのもの，あるいは史料，石碑などを通して，風穴の再発見が進んでいることが伝わってくる。

第Ⅳ部では風穴を中心とした現代の様々な「とりくみ」が紹介されている。世界文化遺産への登録（群馬），蚕種貯蔵から酒の熟成場への転換（長野，福井），風穴利活用委員会の設立（福島），エコミュージアムと教育への活用（秋田），クールスポットの利用（島根）など，じつに多彩である。歴史的遺構，自然的遺存としての意味づけだけでなく，それらをいかに利活用できるかという問題意識は，本書の副タイトルに「産業・観光への活用」とあるように，本書を編んだ人びとの間に共通している。

以上をふまえて，本書の課題と成果を挙げておきたい。課題は各部のつながり，各章の配置の意図など，全体構成についての説明がやや不明確であったことである。扉の言葉に簡潔に本書の目的が述べられているものの，内容が多岐にわたるだけに，全体を貫く軸を提示してほしかった。

本書の成果は次の2点にまとめられる。第1点目はなんといっても巻末の膨大な基礎データの重要性である。風穴に関する文献一覧はもちろんであるが，各地で多くの人びとが関わって作成された「風穴一覧表」と「風穴小屋一覧表」は圧巻である。前者は自然状態（未利用）のもので，後者はこれまで何らかの形で利用された形跡がある風穴である。リストにあげられた自然状態の風穴は124，風穴小屋はじつに400を超える。所在地，地形図・文献との関連，指定・地形・現況などの情報が合わせて掲載され，誰もがこの重要な情報にアクセスできるようになっている。評者は，このような基礎データの惜しみない提供が本書の重要な成果であり，かつ読者へのメッセージであると感じた。このデータに手がかりを得て，次なる研究が始まり，風穴が続々と発見されるかもしれないからである。冒頭に掲げられた「日本の風穴分布」マップは，このデータがあって初めて作成可能な1枚であるし，今後はここに新しい情報が付け加えられ，あるいは新しい図が作成されるかもしれない。本書はその「土台」となる一書である。

第2点目は，本書に関わった人びとと風穴との多彩な関係にみる新しい研究モデルの提示である。自然科学，人文科学，社会科学の融合というだけでなく，教員，建築家，学芸員，市役所職員，研究所研究員，区長，様々なNPO団体，コンサルタント会社，農業法人，風穴の所有者や管理者，風穴を題材に新聞を書いた小学生など，「風穴への興味」を共通項として，じつに多くの人びとがこの風穴研究に関わり，本書が刊行された意義は大きいと強調しておきたい。このネットワークがさらに広がり，また様々な分野と連携していく可能性は，前述したデータの惜しみない公表によって確実に高まっていくだろう。本書はその「きっかけ」となる一書である。

（湯澤規子）

注

1）江波戸昭『蚕糸業地域の経済地理学的研究』大明堂，1969。松村敏『戦間期日本蚕糸業史研究』東京大学出版会，1992など。